

Karmaśataka に見られる 「Kauśāmbī の抗争」について

飯 淵 純 子

アヴァダーナ文献の一つである *Karmaśataka* (以下 Kś.) は梵文原典が失われ蔵訳のみが現存する。Kś. は全 10 章合計 127 話から構成される。物語のほとんどは業報輪廻にもとづく因縁物語であるがその内容は多岐にわたる。Kś. は姉妹編とされてきた *Avadānaśataka* のみならず *Divyāvadāna* (以下 Divy.) や根本説一切有部律 (以下 MSV) 等の文献と共通の伝承・物語を含んでいる。今回は Kś. に見られる「Kauśāmbī の抗争」に注目し Kś. と根本説一切有部系の文献との関わりについて示したい。Kś. には「Kauśāmbī の抗争」に開する物語が二つ含まれている。(1) 第 77 話 (第 6 章・第 6 話) の現在物語の一部と (2) 第 127 話 (第 10 章・第 13 話) である。(1) では Kauśāmbī の比丘達の抗争がもつて仏法滅尽に至ることが語られる。これは『雑阿含経』(以下 [雑阿]) と『阿育王伝』(以下 [伝]) にパラレルがある。(2) は Kauśāmbī 比丘と Vaiśālī 比丘の間に生じた洗浄用の水に関する規則を巡る争いについての物語であり MSV の *Kośāmbakavastu* と一部パラレルである。

(1) 第 77 話 (第 6 章・第 6 話) 「Ānanda (Kun dgaḥ po)」¹⁾

【現在物語】涅槃を前にした仏陀は Mahākāśyapa と Ānanda 及び帝釈天と四大王に涅槃後のことを託す。仏陀は Ānanda に師資相承の系譜を告げ、次に帝釈天と四大王に Kauśāmbī での抗争と法滅の予言をし仏法の存続と保護を誓わせる。

【過去物語 1】 Mahākāśyapa と Ānanda が仏陀の後継者となった因縁

【過去物語 2】 Ānanda が仏陀の後継者となった因縁

【過去物語 3】 Mahākāśyapa が仏陀の後継者となった因縁

Kś. 第 77 話の現在物語後半に見られる「Kauśāmbī の抗争」は [雑阿] 第 25 卷 (大正 2,177b19-180a5) [伝] 第 6-7 卷 (大正 50,126b16-128b4) とパラレルである。これらの文献は『阿育王経』(以下 [経]) や Divy. とともに *Aśokāvadāna* として知られるものであるがこの Kauśāmbī の抗争に関する記述を含むのは上の二資料のみである²⁾。物語は涅槃直前の仏陀が帝釈天と四大王に予言する形で語られる。すなわ

ち「仏滅後千年に南の Śāka 西の Pallava 北の Yavana の三悪王がやって来て寺を破壊し比丘を殺す。その後 Kauśāmbī 国の Mahendrasena 王の息子が悪王達を滅ぼし比丘達を供養するようになるが比丘達は墮落し Kauśāmbī で行われた布薩において阿羅漢と三蔵比丘の間で波羅提木叉を巡って争いが生じる。そこで三蔵比丘の弟子が阿羅漢を殺し、それに怒ったヤクシャがその彼を殺し、さらに阿羅漢の弟子達が三蔵比丘を殺す。これによって正法は滅尽するだろう」というものである。Ks. と [伝] では三悪王の名をあげるが [雑阿] では東の兜沙羅王を加えて四悪王とする。一方、Ks. と [雑阿] では四大王と帝釈天が登場するのに対して [伝] では四大王しか登場しない。他にも Ks. には [伝] に共通の箇所と [雑阿] に共通の箇所が混在するため Ks. の記述が [雑阿] と [伝] のどちらに近いとは一概に言い難い。また [雑阿] のこの部分に関しては後の挿入であるという説もあり³⁾、Ks. の典拠となる資料の特定は難しい。

ところでこの第 77 話は前話第 76 話から続く物語である。第 76 話では Mahākāśyapa が仏涅槃後の後継者となること及びその因縁物語が語られている⁴⁾。これを受けて第 77 話では Mahākāśyapa と並んで Ānanda が後継者となることが述べられる。現在物語前半では仏陀が Ānanda に告げるという形で師資相承の系譜が述べられるが、この記述からは Mahākāśyapa→Ānanda→Madhyāntika→Śānavāsa→Upagupta→Dhītika という系譜が読み取れる。これは [伝] [経] 及び MSV『雑事』に共通する伝承である⁵⁾。ここでの Ks. の記述は要約的なものであり、Ks. がこれらの資料から要点をまとめて抽出したものと考えられる。このように Ks. 第 77 話の現在物語は [伝] [経]・MSV『雑事』に共通する師資相承の伝承の要約と [雑阿] [伝] に共通する「Kauśāmbīの抗争」の伝承によって構成されている。

(2) 第 127 話 (第 10 章・第 13 話) 「Kauśāmbī (Kau śāṃ bī)」⁶⁾

【現在物語】Kauśāmbī の比丘と Vaiśālī の比丘が洗淨用の水瓶についての規則に違反したか否かで対立した。仏陀は双方に対し争いをやめるよう諫めたが争いは治まらなかった。そこで仏陀は争いを起こした比丘を別々に過ぎさせることを決めた。

【過去物語】なし

この「Kauśāmbīの抗争」についての話はパーリ律をはじめ『四分律』『五分律』『十誦律』等の律文献に見られるが、Ks. の物語は MSV の *Kośāmbakavastu* と一致する点が多い⁷⁾。特に Kauśāmbī 比丘と Vaiśālī 比丘の間で争いが起こったとする点や洗淨用の水瓶についての規則は MSV のみに見られるものである。この規則とは

「水がないのに気づいたら自分で満たすか管理者を呼ばなければならない。どちらもしない場合は罪になる」というものである。一方、MSVでは仏陀が争いを止めさせるために Brahmādatta 王と Dīrghila 王の物語を教訓話として語って聞かせたこと、それでも争いが治まらず仏陀が Śrāvastī に行ったこと、争いが12年間続いたこと、結果的に Kauśāmbi の比丘が自らの罪を認めて和合することになったこと等が述べられるがこれらの記述は Kś. には見られず物語の結末も異なっている。教訓話が語られる点や最終的に罪を犯した比丘が罪を認めて和合に至るという点は他の律文献にも見られる。したがって MSV が Kś. を引用したとは考え難い。

以上は Kś. と根本説一切有部との関係を示す手がかりの一部に過ぎない。Kś. にはこの他にも根本説一切有部の伝承を引用・転用して作られたと考えられる物語が多数含まれる。Kś. と根本説一切有部の関係については更なる検討を要する。

- 1) 『台北版（デルゲ版）西蔵経』（以下 D）vol.15, p. 252, fol.265b7-p.255, fol.276a4;『影印北京版西蔵大蔵経』（以下 P）vol.39, p.246, fol.279b2-p.250, fol.290b4;『The Tog Palace Manuscript of the Tibetan Kanjur』（以下 TP）vol.80, fol.399a4-413a7.
- 2) *Aśokāvādāna* については塚本啓祥『改訂増補・初期仏教団史の研究』（山喜房書林、昭和41年）pp.127-136 参照。また *Aśokāvādāna* の Kauśāmbi の抗争については同書 pp.269-270 参照。
- 3) 『雑阿含』巻23・25は漢訳翻訳後に編入された部分であるという。花山勝道「雑阿含経の阿育王譬喩 *Aśokāvādāna* について」（『大倉山学院紀要』第1号、1954年12月、pp.42-54）参照。
- 4) 第76話現在物語中の「汚い姿をした Mahākāśyapa を見た比丘達は彼を軽蔑したが世尊が彼に半坐を与えて説法するのを聞いて彼を尊敬するようになった」という話は *Samyuttanikāya*16.9, 『雑阿含経』巻41（大正2,302a1-b1）、『別訳雑阿含経』巻6（大正2,416c7-417a22）『佛本行集経』巻46（大正3,866c-868a）とパラレルである。
- 5) 根本説一切有部の師資相承の伝承については塚本前掲書 pp.97-99 参照。
- 6) D, vol.15, p.301, fol.124b5-p.302, fol.128b7; P, vol.40, p.53, fol.127a7-p.54, fol.131a8; TP, vol.81, fol.231b2-237b4.
- 7) *Kośāmbakavastu* については山極伸之「根本説一切有部捷度部の研究（1）—Kośāmbakavastu の内容—」（『宗教研究』62-4,1989年3月、pp.184-185）参照。Skt : N. Dutt, *Gilgit Manuscripts*, vol. III part2, pp.173-196, Tib : D, vol.1, p.216, fol.124a7-p.219, fol.134b3; P, vol.41, p.288, fol.119b8-p.292, fol.129b7; TP, vol.3, fol.166a1-180a5.

〈キーワード〉 Karmaśataka, Kauśāmbi, 根本説一切有部

（東北大学大学院）